

3 愛着の発達

小野けい子

発達的基础としての愛着に関して、ジョン・ボウルビイの愛着理論、愛着の形成過程、愛着の個人差について述べるとともに、愛着の個人差から見た親子関係・仲間関係を概観し、生涯発達における愛着について、またソーシャル・ネットワークの役割についても学ぶ。

この章では「愛着の発達」を論じるが、まず愛着と愛着理論についての説明から話を始めたい。「愛着」ということばを国語辞典で引くと、「愛情にひかれて思い切れないこと」「もと仏教で、欲望にとらわれて離れられないこと」（西尾，1971）と出てくるが、ここでいう「愛着」は、イギリスの小児精神科医ボウルビイ（Bowlby, 1969/1982）によって使われ始めた attachment（アタッチメント）ということばの日本語訳であり、もともとの日本語の「愛着」と近い概念ではあるが全く同義ではないため、まず、アタッチメントの説明とボウルビイのアタッチメント理論の説明から始めたい。

1. ボウルビイの愛着理論（アタッチメント理論）

1.1 アタッチメントとは何か

ボウルビイ（1969/1982）が最初に示した attachment の原義は、文字どおり生物個体が他の個体にくっつくようにする（アタッチしようとする）ことに他ならない。「個体がある危機的状況に接し、あるいはまた、そうした危機を予知し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体を通して、主観的な安全の感覚を回復・維持しようとする傾性をアタッチメントと呼んだ」（数井・遠藤，2005）。もともと親子、母子に限定して用いられる用語ではないが、親子について用いられるときも、

原義に見るようにもっぱら親に対する子どものアタッチメントが問題となり、親について取り上げる際は、別途マターナル・アタッチメントのように用いる。アタッチメントの対象は、危機の際の「確実な避難所（safe haven）」となり、情動が静穏化した後、それを拠点に外界に出て行くための「安全基地（secure base）」の機能を果たすこととなる。

このような説明を踏まえた上で、以下、このアタッチメントを「愛着」という訳語を用いて論じることとする。

1.2 愛着理論

1940年代に、施設で生活する乳幼児によくみられたという、歩行などの運動能力の著しい遅れ、言語能力や知能の遅れ、無感動な性格特性、死亡率の高さといったものが「施設病」、「ホスピタリズム」と呼ばれて問題となっていた。WHO からホスピタリズムに関する研究を依頼されたボウルビイ（1951）は、こうした発達上の障害は施設であるから生じるのではなく、外界の文化的環境や、対人的環境を制限されることによって生じることを明らかにし、文化剥奪（cultural deprivation）、母性剥奪（maternal deprivation）ということばを用いて報告を行った。文化剥奪とは外界が単調で変化に富んだ物理的環境が剥奪された状態、母性剥奪とは母性的働きかけがなされない剥奪された状態をいう。こうした障害は、物理的環境を豊かにし（White, 1968）、保育者の比率を高めることによって（たとえば、Spitz, 1962）改善されることが分かっている。

ボウルビイは、愛着に関する3部作（1969, 1973, 1980）を書いて愛着理論を展開しているが、彼は、子どもは最初一人の特定人物に対する愛着を形成するとし、かつ乳児期になされるこの情緒的愛着の形成が障害されると、精神疾患等の人格発達における重篤な歪みをもたらすと警告した。

ボウルビイ（1969, 1973, 1980）の愛着理論は、フロイトの精神分析理論の流れを汲んで、乳幼児期の経験が人格形成上重要な役割を果たすという立場をとっており、人生初期の愛着パターンが生涯にわたって維

持され、更には次世代にも伝達されるものとして提出された。ボウルビイは、乳幼児期における愛着が、行動レベルから、次第に自分と他者一般に対する主観的確信という表象モデル (representational model) として個人の中に取り込まれ、生涯、内的作業モデル (inner working model) として対人関係スタイルや人格の基礎を支えるものとして重要な働きをし続けると仮定している。

最初の愛着対象は一人であるとするボウルビイの「モノトロピー」仮説については、その後の研究で、1対1の養育パターンの多いスコットランドにおける研究でも、乳児の29%は母の他に父や兄弟など最初から複数の人に対する愛着を形成している (Schaffer & Emerson, 1964) といった実証的反論が初期からなされている。またボウルビイの主張する内的作業モデルや世代間伝達についても、後で見るような検討がなされるに至っている。

2. 最初期の母子相互作用の展開と愛着の形成

2.1 最初期の母子相互作用の展開

スイスの動物学者ポルトマン (Portmann, 1951) は、比較動物学の視点から、ヒトという種は、大脳化によって胎児が大型化し、その結果、まだ胎内にいてよいと思われる未熟な赤ん坊 (胎外胎児) を約10か月生理的早産してしまう特殊な哺乳類であると論じた。未熟なヒトという種の新生児は、養育者の存在を予定して対人的世界の中に産み落とされるきわめて社会的存在であるといえることができる。

近年目覚ましい発展を遂げた乳児に関する研究は、ヒトの乳児が、出生直後からきわめて有能で社会的な存在であることを明らかにし、またそれに調和的に呼応する成人の側の能力も明らかにしてきた。「胎外胎児」と呼ばれたヒトの新生児は、運動能力において未熟である一方、視覚・聴覚といった感覚器官が最初期から発達しており、すでに優れた学習能力をもち、さらには、対人的に方向づけられた豊かな能力をもって誕生する。視覚についてみれば、出生時から、約30~40cm (大人が子どもを抱いたときの顔と顔の距離にほぼ等しい) の距離にあるものの追

視が可能であって、生後5日以前の新生児でさえ単純なパターンより複雑なパターンを、さらに人の顔状でないものより人の顔状のものを、選択的に好んでよく見ることが知られている (Fantz, 1961)。また、聴覚において、新生児は出生時にすでに母の声を記憶していて、他から識別して選択することが可能であり、嗅覚においても、生後6~10日の時点で、母の乳の匂いを他人の匂いと識別し母の匂いへの選択的好みを示すという (マクファーレン, 1977)。

新生児は、こうした定位性の反応のみならず、対人的コミュニケーション能力さえもって誕生する。エントレインメント (entrainment) またはインタラクショナル・シンクロニー (interactional synchrony) と呼ばれる大人のことがけに同調した身体運動 (Condon & Sander, 1974; 小林ら, 1983) や、共鳴動作 (co-action) と呼ばれる舌の出し入れや口・手の開閉などの動作の模倣 (Meltzoff & Moore, 1983)、大人の表情の模倣 (Field et al., 1982) が、出生直後から可能である。生後6週頃からは、人の顔への微笑反応がよく生起する (Bower, 1977)。

これに呼応して、母親の側でも乳児と目と目を合わせることによる養育行動の解発 (Robson, 1967)、乳児の聴覚に呼応したピッチの高い声、誇張した表情による働きかけを行い、乳児の表情の大人の側からの模倣と同調行動によるプレイ・ダイアログ (play dialog) が展開する (Brazelton, 1982/1983)。

このように、正常な乳児は、対人的能力と対人的魅力を備えて誕生し、乳児のこうした働きかけの、あるものは大人によって閾値下で知覚されながら調和と同調のある関係づくりに役立ち、またあるものは、もっとはっきりと対人関係の中で知覚され、大人の側 (多くは母親) の「私を見つめているわ」「私を見て笑うのよ」という喜びと愛の感情を促す働きをし、次には、この「私がママよ」というべき働きかけが、さらに子どもの反応性を高めて、乳児と母親を、情動を共有する対人的コミュニケーションの世界に導くものと思われる。

2.2 愛着の形成

特定の人への愛着は、食欲の充足・不快からの解放といった一次的生理的欲求の充足を媒介に成立する二次的動因なのではなく、上記の喜びをとまなう情動的コミュニケーションの中でその基礎が形成されていくものと思われる。

愛着 (attachment) の成立時期を、乳児の示す「人見知り」を指標として、約5～7か月頃とみなす一般的立場に対し、従来考えられていたよりもかなり早いのではないかとの見解がもたらされている。水上・小林 (1986; 1988; Mizukami et al., 1990) は、サーモグラフィーによって計測される顔面皮膚温の変化を乳児のストレス反応の指標として、次のような結果を得ている。生後9週の乳児にも、母親の不在によって、顔面皮膚温の低下が認められ、生後11～16週の乳児において、見知らぬ大人とのやりとり場面で笑っている場合にも、母のいない状況では、やはり皮膚温の低下が認められた。こうした結果は、乳児がこの時期すでに特別な対象 (母親) への愛着を形成し、安全基地として用いていることを示唆するものである。

3. 愛着のタイプを規定する要因と人格発達

3.1 愛着のタイプを規定する母親の感受性要因と人格発達

母子相互作用における特性と人格発達について大きなインパクトを与えているのは、次に述べるエインズワース (Ainsworth, M. D. S.) らの主張である。

ボウルビィとタヴィストック研究所の同僚であったエインズワースは、生後1年間の生態学的観察から、母親の応答のしかたが乳児の泣きに影響を及ぼしているとし (Bell & Ainsworth, 1972)、母親の感受性 (sensitivity)、すなわち子どもの示す信号を感知し、それを的確に解釈し、適切な応答を選択して、すみやかに効果的に実行する能力のあり方が、生後12か月頃までに形成される母親への愛着の質を決定し、さらにそこにみられる社会的・情緒的な関係パターンは、その後、就学前頃までにわたる子どもの人格発達のあり方を予測させるものであると主張している

(Ainsworth et al., 1978)。

彼女らは、12か月の時点で愛着の質を測定するためにストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure; 以下 SSP) と呼ばれる以下のような実験室の方法を考案し、以後、この方法による多くの実験が、世界各国で行われることとなった。その方法は、見知らぬ大人の入室と、2回の母子分離によって乳児に段階的ストレスをかけ、この母子の分離と再会時における子どもの反応をみるというもので、その結果から子どもの愛着を大きく3タイプに分類している。まずAタイプ (回避型) は、母親と一緒にいる場面で接触しようとせず分離時に動揺を示さず、再会時に歓迎行動を示さない。これに対し、B、Cタイプははっきりとした分離不安を示すが適応性において異なっており、Bタイプ (安定型) は、ストレンジ場面でも母親を安全の基地として活発な探索を行い、母子分離場面で悲しみを示すが再会によって容易に泣きやむのに対し、Cタイプ (アンビヴァレント型) は、ストレンジ場面への不安が強く分離時に激しく泣き再会時にもなだめるのが困難であったり、母親への抗議を示す。エインズワースはBタイプを安定した (secure) 愛着、A・Cタイプをいずれも不安定な (insecure) 愛着を示しているとし、この愛着における安定と不安定の差は、4か月時における母親の対応が敏感 (sensitive) であったか否かによって、予想しうるものであったという。すなわち、Aタイプの子どもの母親は全般的に子どもの働きかけに拒否的に振舞うことが多く、Bタイプの子どもの母親は子どもの欲求や状態の変化などに相対的に敏感であり、子どもに対して過剰あるいは無理な働きかけをすることが少ない。Cタイプの子どもの母親は、子どもからの各種アタッチメントのシグナルに対する敏感さが相対的に低く、自分の気分や都合によって反応の一貫性に欠ける傾向があるといわれる。さらにこの愛着タイプの差は、その後の2歳から就学前にわたる間の子どもの情緒・社会性の発達と一定の関係があると主張されている。12か月の時点で安定した愛着を形成していたBタイプは、2歳から就学前の長期にわたって、母親に親和的で、親からの社会化の働きかけに対して受容的で、積極的に反応することが多く、探索的行動

が活発で、課題解決場面において熱心に取り組み、親の援助を引き出すこと、受けることに優れており、仲間関係も良好であるという。この3タイプの他に、1990年代になってDタイプ（無秩序・無方向型 disorganized-disoriented type）が見出されている（Main & Solomon, 1990）。Dタイプは、親との再会時にもボーとしていたり、抑うつや混乱を示すかのような動作の停止が見られたり、親に対して強く接近を求めた後に激しく回避したり、親から顔や視線をそらしつつ接近・接触するような相矛盾した、文字どおり組織化されていない行動をする。Dタイプは、心的外傷から十分回復していない養育者、抑うつ傾向の高い養育者の子ども、また、被虐待児に多く見出され、精神病理上のハンディをもつものとして臨床的視点から注目を集めている。

3.2 愛着のタイプを規定する文化的要因と人格発達

ストレンジ・シチュエーション法による各国での研究結果を表3-1に示した。日本においては、Aタイプの出現がごく稀かまたは皆無であり、Bタイプの出現率がやや高いが、三宅らのデータでは、Cタイプもかなりの高出現率を示している。西ドイツ(当時)においては、Aタイプの出現率が高く、その分Bタイプの出現率が低い。スウェーデンではCタイプの出現が少ないなど、文化による愛着の質の差は大きい。

表3-1 愛着の分類の国際比較

タイプ	A	B	C	
アメリカ	21.2%	54.4%	15.5%	8種の研究をまとめたもの N=349 Camposら(1983)から作表
西ドイツ	49.0	32.7	12.2	N=49 Grossmannら(1981)による
スウェーデン	21.6	74.5	3.9	N=51 Lambら(1982)による
イスラエル	13.5	69.2	17.3	N=52 Sagiら(1985)による
日本(I)	0.0	74.1	25.9	N=54 Miyakeら(1985)と Miyake(1986)をまとめたもの
日本(II)	6.2	79.2	14.6	N=388 繁多ら(1981)による

注) A, B, C に分類不能な子どものあるとき、A, B, C の合計が100%に満たない。

この差を文化による母親の感受性の差であると主張するとしても、感受性という概念そのものが多分に質・価値を含む概念であり、何をもって適切な敏感さとするかの判断基準も文化依存的である。表3-1の結果の背景には、文化によってどういう感受性が良いとされているのか、どういう子どもが理想であるのかといったことまでもが影響を与えていると思われ、簡単に論じることはできない。

アメリカと日本についていえば、アメリカでは子どもを独立的で表出的であるようにしつける傾向が、日本では相互協調的で抑制的であるようにしつける傾向が優位であり（柏木他, 1997）、**アメリカの育児法に比べ、日本の育児法は母子の身体的接近が維持されることが多いと指摘**されている（Caudill & Weinstein, 1969）。こうした育児法の差異が、SSP 分離場面において子どもの感じるストレス強度の差異をもたらすことが想定される。ストレスが強ければAタイプは出現せず、なかなか泣きやまないCタイプが増加することとなる。

3.3 愛着のタイプを規定する乳児の気質要因と人格発達

エインズワースらは、愛着の質が、母の感受性によって決定されるとしたが、この感受性も、母親の人格特性として全く不変であるというより、夫との関係のようなサポートシステムや、子どもの側の個性の影響を受けることが考えられる。

ゴールドバーグ（Goldberg, 1977）は、子どもの側の刺激への「応答性」、意図の「読み取りやすさ」、次の反応の「予測しやすさ」が、母子相互作用に影響すると述べている。

トマスら（Thomas et al., 1968）は、子どもの行動特性には、発達の最初期からかなりの長期にわたって維持される比較的安定した**気質（temperament）**の個人差のみられることを指摘している。乳児期の子どもについて、睡眠・食欲・排泄などに規則性があり、新しい刺激に対して積極的で、順応性があり、反応の強さが適当である「楽な子」（40%）、反対に生物学的機能が不規則で、新しい刺激に回避的で、順応が遅く、不快の表出が多い「難しい子」（10%）、生物学的機能に規則性が

あり、機嫌もよいが、新しい場面や人に回避的である「出だしの遅い子」(15%)の3種の気質が認められたが、青年期に至って、精神医学的問題の生じたのは楽な子の18%、難しい子の70%、出だしの遅い子の40%であったという。「幼児性格質問紙」(Infant Characteristics Questionnaire; Bates, 1986)を作製したベイツら(Bates et al., 1985)も、乳児期後期と2歳時に扱いにくい子は、3歳時に問題行動と母子間の葛藤を生じやすいことを示している。

ケイガン(Kagan, 1989; Kagan et al., 1989)は、気質について観察による行動指標からとらえた「行動的抑制 (behavioral inhibition)」という概念を提出している。1歳9か月時に、知らない大人から話しかけられる、ロボットに出会うといった、新奇な事物・対象・状況に対して、それまでしていた遊びを中断させたり、警戒を示したりという行動によって示される行動抑制傾向には、7歳半に至るまで臆病・恥ずかしがり・慎重・内気という形で、かなりの一貫性がみられるという。

三宅(1991)のデータは、この抑制傾向もまた、SSP法における愛着のタイプ分類に影響することを示している。7~8か月時の実験室における知らない大人に対してする反応、12か月時のSSPでの愛着のタイプ、23か月時のロボット、知らない大人、知らない子どもに対する反応、27か月時の母親による評定からみた日常場面での新奇な対象・人への反応を、縦断的に検討すると、7, 8か月時の抑制傾向は、12か月時における愛着のタイプの実に90%を予測しており、全期間を通じて一貫しているのは、新奇な対象・場面对する抑制傾向であって、12か月時のSSP場面でのBタイプ・Cタイプの差は、養育者の感受性の影響による愛着の質の差というより、気質的抑制傾向を反映した情動表出傾向の差ではないかとの根源的問いをも投げかけるものである。

行動抑制傾向、つまり臆病・内気・怖がりやすさ(fearfulness)といった気質傾向がCタイプでは高く、Aタイプでは相対的に低く、BタイプはA・Cタイプの中間的な気質特徴を備えたタイプであるとみることも可能である。

4. 生涯発達における愛着と人格発達

4.1 愛着と内的作業モデル

ボウルビィの愛着理論の立場では、内的作業モデルについて次のようにみている。SSPによるタイプ分類のAタイプの子どもは「自分は拒否される存在である」といったモデルを、Bタイプの子どもは「自分は受容される存在である」「他者は自分が困った時には助けてくれる」というモデルを、Cタイプの子どもは「自分はいつ見捨てられるかもわからない」「他者はいつ自分の前からいなくなるかわからない」という内的作業モデルを形成しやすいと考えられる。

ベルスキー(Belsky, 2000)によれば、乳幼児期にBタイプだった子どもは、その後の就学前から児童期において、この内的作業モデルに従って、概して仲間に対して積極的にしかも肯定的に働きかけることが多く、また共感的行動を多く示すために仲間からの人気がより高くなるのに対し、Aタイプの子どもは仲間に対して否定的感情をもってやや攻撃的に振舞うことが多いため、仲間から拒否され孤立する傾向が高く、Cタイプの子どもは、他児の注意を過度に引こうとしたり衝動的かつフラストレーションに陥りやすかったりする一方で、時に従属的な態度を取ることも少なくはなく、仲間から無視されたり攻撃されたりする確率が相対的に高いという。

4.2 乳児期の愛着タイプと成人の愛着タイプに連続性はあるのか

12か月時の愛着タイプ(A, B, C, Dの4タイプ)と6歳児の愛着タイプの連続性をみたワートナー(Wartner et al., 1994)の研究では82%の一致をみているが、成人後の愛着のタイプに、連続性があるのだろうか。成人の愛着のタイプをみるためにはアダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview; 以下AAI)(Main & Goldwyn, 1984)という方法が取られている。この方法は、両親(あるいは養育代理の人)との関係について子ども時代のことを想起して語ってもらう中で、個人の愛着システムの活性化を促すよう工夫されており、

養育者と自らにまつわる正負さまざまの記憶表象にどれだけ容易にアクセスし、また、それらを基に、どれだけ不安や防衛なく語りを構成しえるのかを測り、4種の愛着タイプに分類している。養育者に対して表面的なこと以外はほとんど話そうとしない「アタッチメント軽視型」、養育者に対し防衛なく容易に整合一貫した語りを構成できる「安定自律型」、話が冗長で一貫性がなく、過去のことを語りながら、それがまるで今のこのように取り乱したりする傾向のある「とらわれ型」、過去に被虐待などのトラウマ体験や愛着対象の喪失をもち、それに対していまだに葛藤した感情を抱えているか「喪の過程」から抜け出しておらず、時に発話の中に非現実的な内容が入り混じる「未解決型」に分類している。そしてこれは順に乳児期のSSPにおけるAタイプ（回避型）、Bタイプ（安定型）、Cタイプ（アンビヴァレント型）、Dタイプ（無秩序・無方向型）に対応するものと仮定されている。

ウェイターら（Water et al., 2000）は、60人の米国白人ミドルクラスのサンプルについて、乳児期のSSPによるアタッチメント・タイプとAAIによって測定した21歳時のアタッチメント・タイプとの間に、A、B、C 3分類で64%、安定／不安定 2 分類で72%の一致が認められたと報告している。

その一方で、グロスマンら（Grossmann et al., 2002, 2005）のドイツでの研究は、21, 22歳まで追跡可能であった38人について乳児期のSSPと成人期のAAI分類に有意な関係を見出せなかったと報告し、ハイリスクの貧困家庭で生育した57人を対象としたワインフィールドら（Weinfield et al., 2000）も乳児期のSSPと成人期のAAI分類に連続性は見出せなかったことを報告している。

このように乳児期と成人期における愛着の連続性について一貫した結果は得られていない。つまりボウルビィの仮定したような強固な内的作業モデルの存在は検証されていない。もともと人は成長とともに多様なソーシャル・ネットワークの中で生活するようになるのが一般的であるといえよう。15章で、一人の人を幾重にも囲むソーシャル・ネットワークのコンボイ・モデルを紹介しているが、成長にしたがって、複数の他

者との多様な人間関係を持つようになることは必然であり、重要な他者との出会いによって、以前の愛着対象を再評価し、既存の関係が変化することも想定することができる。親しい関係の連続も不連続も生じることがソーシャル・ネットワークの視点からは理解される。

比較的高い連続性の認められた上記ウェイターズらのA、B、C 3 分類の64%という一致率の場合でも三人に一人は成人になるまでに愛着の変質が生じており、過去に不遇で不安定な親子関係を経験しながらも、AAIで安定自律型に分類されるようになった「獲得安定型（earned secure）」（Pearson et al., 1994）の者は少なくなく、この安定型獲得までのメカニズムが、今多くの研究者の関心を集めている。クローウェルらの研究（Crowell et al., 2002）は、結婚後不安定型から安定型に移行した者が少なくないことを示し、新たに、緊密で持続的な関係を構築することが、その人のアタッチメントの質を変貌させることを示していて興味深い。

4.3 剥奪事例の長期縦断研究からみた愛着の役割

藤永ら（1987；Fujinaga et al., 1990）は、両親によって孤立した小屋に放置され、2歳と3歳年上の幼い姉たちによってわずかな世話が行われていたのみという、甚だしい剥奪を受けていた姉弟の事例について、1972年の発見から20年にわたる発達援助と追跡研究を行った。彼らは、発見当時すでに6歳（女児）と5歳（男児）になっていたにもかかわらず、身長わずか80cm、体重8kg、排泄のコントロール不能、つかまり立ちはするが歩行は不能で、ことばもほとんどもっていなかった。約1歳かせいぜい1歳半の発達水準とみえるものであったという。6歳が就学年齢であることを思うとき、彼らの発達遅滞が、いかに重度であったかが理解できる。しかし、救出されて施設に収容されるや、心身ともに驚くべき急激な追いつき現象が生じて、保育者との愛着の形成にともなって順調な発達を遂げ、ほぼ平均的な体位となり、両者ともに高校を卒業して社会人となり、一人は結婚して母となった。この事例において、生涯は、あまりにも厳しい環境条件に直面して一時発達そのものを抑制し、

その代償として発達のポテンシャルはそのままに維持して「冬眠」していたかにみえると述べられている。ここで注目すべきは、「冬眠」の解除を行ったのは、愛着の形成であったという点である。諏訪（1983）による愛情遮断性小人症の事例にも同じ現象をみることができ、家庭にいるときには、ほとんど身長が増加がみられず、入院時と、施設収容後に、目覚ましい身長の伸びが観察されている。諏訪によれば、被虐待児症候群35例中27例（77.1%）について成長障害（身長が標準身長より大幅に低い）が認められ、成長ホルモンの分泌機能低下、またホルモンへの感受性の低下といったことが認められるという。藤永ら（1987）は、「開放システムとしてのヒトの発達過程を、対人的・社会的環境からの入力情報が始動させる」という図式を提出している。

この剥奪事例の長期縦断研究は、人間は可塑性に富んでいること、愛着の対象は実際の親とは限らないこと、愛着の形成は乳児期に限らず、その後も形成され発達的变化を遂げること、乳幼児期の親との関係に恵まれなくとも、信頼しうる重要な他者との出会いとソーシャル・ネットワークの支えによって、健康な人格発達のなしえることを示していた。しかし養育者との間に強い愛着を形成し、基底的な対人的信頼感を獲得することは、人間発達の根底を支えるものであることも示していたといえよう。

研究課題

1. 文化剥奪・母性剥奪の症状と、その成因についてまとめてみよう。
2. 母子相互作用を規定する要因についてまとめてみよう。
3. 藤永ら（1987）の事例における「冬眠」現象とはどんなものであったか、まとめてみよう。